

地域住民の自主的な生涯学習サークルを紹介します。今回は、茨城大学または茨城大学生涯学習教育研究センターと何らかの関係のある近郊の学習グループの紹介です。

## 水戸ドイツ語クラブ

藤平誠二

水戸に「ドイツ語クラブ」がある。毎週土曜日午後2時から2時間、水戸市文化福祉会館の2階研修室でドイツ語のグループ学習が行われている。

かつて茨城大学人文学部主催でドイツ語講座（初級、中級、上級）が行われていたが、その受講生たち数名が、受講後も引き続きドイツ語の、ことにドイツ語会話の学習機会を持ちたいとの希望で、1985年12月に結成（本格的学習活動は翌年1月から）したものである。その点でこのクラブは茨城大学の公開講座が母体となって生まれたと言える。

メンバーは、時々で出入りがあるが、常時ほぼ20名（延べ総会員は40名にのぼる）、毎週の例会に出席する者は約10名である。市内、近郊、遠くは大宮市から集まって来る。世代的には20代から80才過ぎまで、男女はほぼ半々、割合としてはやはり退職者と主婦が多いが、現役有職者も多い。時に学生も交じる。

当初はもっぱら会話の練習であったが、その後は新聞、雑誌の記事の読解や文法学習などドイツ語、ドイツ文化全般に渡り幅広く学習している。学習方法も、テープやビデオを活用することはもちろん、動作を交えた寸劇を行ったり、相互に質疑応答したり、その都度様々な方法を取り入れ、飽きの来ないよう工夫している。

私（報告者）が本来大学のドイツ語教師でもあるので、例会でも「先生」の役を努めるが、あくまで一メンバーに過ぎず、先生役は謝礼なしのボランティアである。会の運営はあくまで民主的に（男性でもお茶を入れ、菓子を配る）、相談と合意の上でなされる。

クラブの特徴は何より「和気あいあい」なことである。ドイツ語学習も「しっかりやるが、無理しない」方針。個性的な人物が多いが、皆「おとな」である。そのくせ、中間の休み時間に茶菓子とともに大いに語り、それを何よりの楽しみにしている。それで、「この会が私の生きがいだ」という人が少なくとも複数いる。

年に何回か、市内近郊に滞在するドイツ語圏からの人（原研の交換研究員が多い）をゲストとして招いて、ドイツ語でのフリーな話し合いをする。と言っても流暢にとはいかないが。共に市内見物やハイキングをしたこともある。ドイツ語を母国語とするゲストは今までに19名にのぼり、延べ回数にすると40回程度になるうか。この点でクラブはまさに草の根の国際交流の役を果たしている。

このように水戸ドイツ語クラブは市民による典型的な生涯学習サークルである。生涯学習は本来地味で忍耐を要するものである。クラブでよく口にのぼる格言が「継続は力なり」である。その持続性と良き人との交流の場になっていることから、自画自賛で言えば、このクラブは典型的で模範的な生涯学習サークルであると言える。

この水戸ドイツ語クラブが発足後ほぼ12年になる。12周年を記念してこの度「記念文集」を発行した。メンバーの多くがドイツ語で短いエッセイを作文し、日本語文も付けた。また、かつてゲストとして来て頂いたドイツ語圏の人々6名からの寄稿も掲載した。

そこで、ここにその「記念文集」の内から3名による独文、和文（6ページ分）を抜粋、掲載して水戸ドイツ語クラブの紹介の一端にしたい。

## Frau Berta Oberbeck

Takeo ADACHI

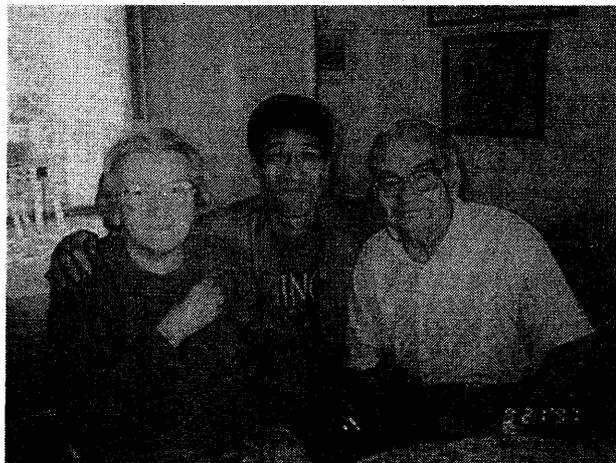
Frau Berta Oberbeck hat auf mich einen tiefen Eindruck gemacht, während ich vor 12 Jahren in Deutschland war. Ich arbeitete von März 1984 bis im Juni 1985 bei Europäischem Institut für Kernforschung als Gastwissenschaftler.

Ich wohnte damals in einem kleinen Dorf, Leopoldshafen (etwa 15km von Karlsruhe entfernt), mit meiner Familie, Kayako, Yukiko und Nobuko. Wir mieten in der Nähe des Instituts eine Wohnung. Wir haben uns schnell ans Deutschlandsleben gewöhnt, weil die Wohnung mit voll Möbel war und der ehemalige Bewohner Japaner war.

Berta wohnte mit ihrer Familie in einer anderen Wohnung, nicht weit von uns. Sie besuchte uns oft und fragte, ob wir Schwierigkeiten hatten. Sie führte meine Frau, Kayako, bei Frau Ilka Kuhn als Deutschlehrerin ein, lud uns zum Kaffee ein, gab Puppen zu meinen Töchtern und ließ Klappbetten, wenn wir Gäste aus Japan hatten.

Ich verstand von ihr, daß sie vielen Ausländern half, wenn sie Schwierigkeiten in der Sprache, Wohnungen, Möbel, Schule usw. hatten. Ich schätze sie hoch und bin sehr dankbar für ihre Haltung. Ich glaube, daß die Tat von Berta für das gegenseitige Verständnis sehr wichtig ist.

Als ich im letzten September Berta besuchte, war sie an den Rollstuhl gebunden, weil sie wegen des Diabetes nicht nur die Sehkraft sondern auch die Beine verloren hatte.



## ベルタ・オーバーベック

安達武雄

12年前ドイツに滞在していたとき強い印象を与えたのがベルタ・オーバーベックさんです。私は1984年3月から1985年6月までヨーロッパ連合の原子力研究所で客員研究員として働いていました。その当時私は家族、賀弥子、由希子、伸子とともにカールスルーエから約15km離れたレオポルツハーフェンという小さな村に住んでおり、研究所の近くのアパートを借りていました。ドイツの生活にすぐに私達は慣れました。というのは、アパートが完全な家具付きで、アパートの前の住人が日本人だったからです。

ベルタは近くの同じようなアパートに家族と一緒に住んでいました。彼女は度々私達のアパートを訪れ、何か困ったことはないかと声をかけてくれました。彼女は賀弥子にドイツ語会話の教師としてイルカ・クーンさんを紹介し、コーヒーに招き、娘達に人形をくれ、日本からお客さんが来たときには簡易ベットを貸してくれました。

私が彼女を知ってわかったのは、多数の外国人が言葉、住居、家具、学校等々で困っているときに、彼女が助力を惜しまないということでした。私は彼女のそういう態度を非常に高く評価します。ベルタのそのような行動こそが相互理解において非常に重要であると思います。

今年の9月ベルタを訪れたとき、彼女は車椅子生活をしていました。彼女は糖尿病のため、視力はもとより両足を失っていたからです。



## Begegnung mit Sport und Deutschland

Yasuko FUJIHIRA

Im Jahr 1963 wurde in Tokyo die All-Japanmeisterschaft der Leichtathletik mit der Teilnahme der vielen ausländischen Spieler eröffnet. Das hieß anderes "Internationalsportfest in Tokyo", aber man nannte es auch "Pre-Olympic". Damals war ich Höhere Schülerin und kämpfte im Fünfkampf mit Frau Jutta Heine zusammen, die aus Hannover gekommen war. Sie war größer als ich und eine reizende Dame, wie ein "Superstar" für mich. Also versäumte ich nicht die Chance, ihr Autogramm zu bekommen und ließ mich mit ihr fotografieren. Das war meine schöne, glänzende Erinnerung.

Im Jahr 1964 wurde die "Olympiade in Tokyo" endlich in Japan eröffnet. Ich konnte leider nicht am Wettkampf teilnehmen, aber mir mit den Freundinnen zusammen Wettspiele ansehen. In Tokyo kamen damals viele Spieler und Zuschauer aus der ganzen Welt. Der 17. Oktober war für mich ein besonderer eindrucksvoller Tag. Der Stabhochsprung begann um 13 Uhr, aber dehnte sich bis um 22 Uhr am Abend aus. Der letzte Kampf zwischen F.M.Hansen aus USA und W.Reinhardt aus Deutschland war ganz toll und wurde eine Sensation. Dabei habe ich einen Deutschen kennengelernt, der mit uns den beiden applaudiert hat. Die Szene hat sich mir immer noch ins Gedächtnis eingebrannt. Ich habe wiedermal eine schöne Erinnerung haben können. Und da habe ich den Wunsch gehabt, einmal nach Deutschland zu fliegen.

Im Jahr 1984 bin ich endlich mit meiner Familie nach Deutschland geflogen und wir wohnten ein Jahr in Mannheim. Inzwischen habe ich Deutsche Sporthochschule in Köln besucht und dort die wunderbare Sportanstalt besichtigt. Außerdem habe ich an der Mainzer Universität Herrn Dr.Wischmann besucht, der Mannschaftsleiter bei der Tokyo Olympiade war, und mit ihm gesprochen und von ihm gelernt. Damit habe ich mir endlich einen Herzenswunsch erfüllen können.



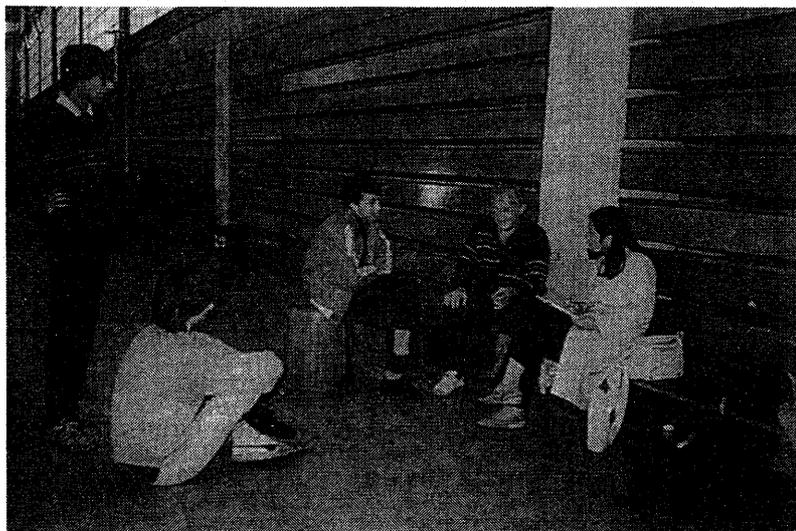
## スポーツとドイツとの出会い

藤平保子

1963年、全日本陸上競技選手権大会が東京で、多くの外国からの選手を迎え開かれました。別名では、東京国際スポーツ大会でしたが、プレ・オリンピックとも言われました。当時私は高校生でしたが、ドイツのハノーバーから来たユッタ・ハイネ選手と一緒に五種競技で競いました。彼女は大きく魅力的で私にとってはまるでスーパースターでした。もちろん私は彼女のサインをもらうことを忘れませんでしたし、一緒に写真も撮ってもらいました。私のすばらしい思い出の一つです。

1964年、ついに日本でオリンピックが開かれました。私は参加できませんでしたが、友達と観戦できました。東京には世界中から選手達が来まし、外国からは観戦のために沢山の人が来ていました。10月17日は私には特に印象深い日でした。1時に始まった棒高跳は夜の10時まで延々と続きました。アメリカのハンセン選手とドイツのラインハルト選手の最後の戦いはすばらしいもので、大きなニュースとなりました。その時私たちと応援していたドイツ人とも知り合いになりました。それらの光景は今も脳裏に焼き付いています。私はまたもすばらしい時を持てたのでした。そして、いつの日か私もドイツに行きたいと思ったのでした。

1984年、ついに私は家族と共にドイツに行き、私たちはマンハイムに1年間滞在しました。その間にケルン体育大学ではすばらしいスポーツ施設を見学し、マインツ大学では、東京オリンピックの時監督であったウィッシュマン博士を訪ねて話をし、勉強することもできました。これで私は念願を果たすことができたのでした。



## Michael Endes >MOMO<

Tsukasa SANO

Am 26. Februar 1996 habe ich erstmal ein Buch auf Deutsch zum Ende gelesen. Das Buch heißt Michael Endes >MOMO< und das ist für Kinder geschrieben worden. Dafür hat der Autor in Deutschland den Jugendbuchpreis gewonnen. Nach meiner Meinung gehört das Buch einer Art Satire-Literatur und interessiert nicht nur Kinder sondern auch Erwachsenen.

Das Buch hat 267 Seiten und ich habe vermutet, daß ich, um bis zum Ende zu lesen, mehr als drei Monaten brauchen muß. Die Geschichte war fantastisch und sehr interessant, aber, ehrlich gesagt, das Buch war für mich ein bißchen schwer als ein deutsches Lehrbuch. Besonders habe ich für Nachschlag des Wörterbuches viel Zeit gebraucht, um Umgangsprachen zu Verstehen, zum Beispiel >das Blaue von Himmel reden;in der Tinte sitzen;Hals über Kopf< usw. Es war nach 5 Monate, daß ich endlich bis zum Ende durchgelesen hat.

Der 20. Kapitel ist für mich am eindrucksvollsten. Da hält die Zeit plötzlich ihre eigene Bewegung auf. Deshalb hängen Flugzeuge am Himmel, bleiben Blätter in der Luft, bleiben Menschen und Tieren in verschiedenen Haltungen auf der Straße stehen. In der gefrorenen Stadt läuft nur Momo mit einer wunderbaren Stunden-Blume in ihrer Hand und die Zeitdiebe laufen Momo nach.

Zur Zeit bin ich Rentner und habe viel Zeit, gemächlich zu leben und habe ich so viel Zeit, daß ich jeden Tag frische deutsche Zeitungen "on Internet" lesen kann. Früher war ich über 40 Jahren lang als Elektroingenieur tätig. Ich mußte jeden Tag unter der Befehl der Zeitdiebe schnell wie möglich arbeiten. Das Buch hat mir sicher die Chance gegeben, über meine hektische 40 Jahren und auch heutige geräuschvolle Gesellschaft nachzudenken.

Ich will immer weiter Deutsch und deutsche Kultur lernen.



## ミヒャエル エンデの「モモ」

佐野 司

1996年2月26日に、始めてドイツの原書を最後まで読み通しました。本の名はミヒャエル エンデの「モモ」で、子供のために書かれた本です。作者は、その本により、ドイツで児童文学賞を授与されています。私は、この本は一種の風刺文学で、子供にとってのみならず大人にもたいへん興味深い本だと感じました。

その本は267 ページあるので、多分読み終わるのに3ヶ月以上かかるに違いないと考えました。この物語は大変に痛快で面白いものでしたが、正直のところドイツ語の教科書としては私にとっては少し難しい物でした。特に「空の青さについて話す＝どうでもいいことをべらべらしゃべる」「頭の上の首＝あはてふためいて」「インクの中に座る＝とても困っている」などのドイツの日常語を辞書でひいて理解するのに時間がかかりました。最後まで読了するのに5ヶ月かかってしまいました。

第20章が私には一番印象深く感じられました。そこでは、突然時間が動きを止めてしまいます。そのために、飛行機は空にぶら下がり、木の葉は空中に止まり、人や動物は、街路上でいろんな姿勢のまま立ちつくしています。時間が止まり凍り付いた町中をモモだけが、不思議な「時間の花束」を手を持って走り、その後を時間泥棒が追いかけています。

私は今は年金生活に入りのんびりと生活し、自由な時間も沢山あるので、毎朝インターネットで新しいドイツの新聞を読んでいます。以前、私は電気技術者として、いわば「時間泥棒」に追い立てられるかのごとく、出来るだけ早く仕事を仕上げるよう、40年以上もの間働いてきました。この本が、多忙だった40年および騒々しい現代社会に対する反省の機会を私に与えてくれたのは確かです。

今後もさらに、ドイツ語およびドイツの文化について勉強を続けたいと思います。